主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	Ash Leigh Spreadbury

主 論 文 題 名：

Emergence of Discourse in and as Constructions

（創発する談話―構文の中の姿、構文としての姿―）

（内容の要旨）

本論文の目的は、認知言語学・構文文法の観点から「文法」と「談話」の関係を明らかにし、文境界を越えた言語知識とその創発・定着の過程を解明することである。構文文法の枠組みでは、主に節や文レベルの構文が研究対象とされ、より大きなスパンの談話の分析がおろそかにされてきた。本論文は、構文（即ち形式と意味の慣習的な組み合わせ）と談話的文脈が密接な関係にあることを使用基盤モデルを基に多角的に論証し、その言語的、認知的基盤を明らかにするものである。

(1) a.　Carpenter drowned cat.　(Östman 2005: 123)

　　b.　Brush mushrooms with olive oil and sprinkle with salt and pepper.

(*Vegetarian Times*, June 2002, Issue 298, p. 36)

(1a)に見られるような冠詞の省略は新聞記事のタイトルにおいてのみ容認され、(1b)に見られるような目的語代名詞の省略はレシピの調理手順の説明など非常に限られた文脈においてのみ容認される。また、談話を具体化する言語形式にも慣習化されたパターンが観察される。例えば、レシピのような談話では決まった形式が慣習として意味を喚起しているため、こうした談話の定型的なパターン自体を「構文」とみなすことができる。このように、我々の言語知識を考える上で、「文法」のみならず「談話」にも目を向ける必要があるが、言語形式と談話的文脈の慣習的な結びつきについては、さまざまに賛否両論があり、決定的な議論はいまだない。本論文は、事例研究を通じ、言語形式と談話的文脈の慣習的な結びつきに関する新たな証拠を提示し、文法と談話の関係を詳細に解明することを試みるものである。以降、本論文を構成する全８章の概要を述べる。

第１章では、上に述べた問題意識を提示した上で、「慣習的な言語知識のあり方の解明」という構文文法の根本的な目的の観点から構文と談話の関係、および談話レベルの構文の可能性を調べる意義を説明する。言語学の一つの基本的な問いを Hilpert (2014: 1)は “What do you know when you know a language?”（ある個別言語を知っているということは何を知っていることなのか）と表現している。その「知っていること」が談

話レベルの知識を含むのであれば、分析する必要がある。

第２章では、本論文で用いる理論的枠組みである認知言語学・構文文法(Langacker 1987; Goldberg 2006)を説明する。従来の生成文法的言語観との違いを示しながら、記号的文法観（the symbolic view of grammar）・語彙と文法の連続体（the syntax-lexicon continuum）・使用基盤モデル（the usage-based model）・言語知識のネットワークモデル（a structured inventory of linguistic units）・百科事典的意味論（encyclopedic knowledge）などこのアプローチの重要な概念を解説する。

第３章では、認知言語学・構文文法の枠組みで行われてきた談話に関する先行研究を批判的に検討する。まず、談話と構文の関係に対する二つのアプローチを紹介する。一つは、使用基盤モデルに基づいて実際の言語経験の一般化による談話的文脈と言語形式の慣習的な結びつきを認めるものである(e.g., Ruppenhofer & Michaelis 2010; Nikiforidou 2015, 2021)。もう一つは、文法知識と談話に関する知識をはっきりと分け、慣習的な結びつきを認めず、談話と文法の相関を機能的動機付けによって説明しようとするものである(e.g., Fischer 2015; Matsumoto 2015)。ここで、先行研究で報告されている実証的証拠を踏まえ、主に前者の立場を支持するとした上で、機能的動機付けにも目を向ける必要があると論じる。次に、談話レベルの構文の形式と意味の特徴に関する先行研究(e.g., Antonopoulou & Nikiforidou 2011; Östman 2005)を検討し、共通点を抽出する。最後に、ジャンル論の研究における諸アプローチを検討し、認知言語学と親和性が高いものとして Communicative Genres と呼ばれるアプローチ(Luckmann 1989, 1992; Günthner & Knoblauch 1995)を紹介する。談話の形式の多層的な分析の仕方や談話の組織的・社会的側面の考慮など、認知言語学者がこのアプローチから学ぶべきことを考察する。

第４章から第６章にかけては、さまざまな複雑度の談話レベルの構文に関する事例研究の結果を提示する。通常の構文と異なる談話レベルの構文の形式と意味の特徴や談話レベルの構文の創発の動機付けや定着の過程の観点から分析する。

第４章では、最初の事例研究として、[X they said Y they said]という形式を取る文境界を越えた構文を対象にコーパス調査を行う。まず、この形式が一つの機能（ある行為に関する評価を皮肉に否定する機能）と慣習的に結びついていることを示す。この構文の初期の事例にゲームの台詞である(2a)がある。ゲームの台詞に始まったこの構文は、使用文脈を拡大させながら、(2b)-(2d)のようにその形式を抽象化させてきたことを示す。この抽象化の過程を「形式の拡大」(Himmelmann 2004)や「意味の希薄化に伴う語用論的含意の意味化」(Sweetser 1988)や「もじり」(Zwicky 2006)などの観点から説明することを試みる。また、この構文の動機づけ（なぜこの意味を伝えるのにこの形式が選

ばれたのか）を説明するために、Grice（1975)の様態の格率に言及し、コーパスの頻度に基づいて文末のthey saidの珍しさとthey saidを複数回繰り返すことの珍しさを指摘している。

(2) a. “Join the army,” they said. “It will be fun,” they said. (*Company of Hereos*)
b. Go on the cable car they said, it will be fun they said (enTenTen15)
c. Learn Rails they said. It’s easy they said. (enTenTen15)
d. Change your plan and phone line set-up they said. It will be easy they said. It will save your business money they said. You won’t notice any change at all they said. (iWeb Corpus)

第５章では、Three Minute Thesis（以下 3MT と略記）という比較的新しいタイプの研究発表を分析する。3MT とは、2008 年にオーストラリアのクイーンズランド大学で始まった発表大会で、大学院生が修士課程ないし博士課程における自らの研究内容をわずか３分で発表するものである。2017 年～2018 年にクイーンズランド大学で行われた 3MT 大会の映像をデータとし、発表の導入部分が同じパターンに従っていることを示す。この定着した形式を記述し、論理構造・統語・語彙などさまざまなレベルでパターンが発表間で統一されていることを示し、話者の言語知識においてこのパターンと 3MT という談話的文脈が慣習として結びついていることを指摘する。また、この慣習化されたパターンの動機付けを(i)厳しい時間的制約、(ii)発表者－聴衆間関係の観点から解明する。3MT の状況的・社会的特徴が使用される言語形式に影響を及ぼしていることを示す。この分析は、TED Talks や学会発表など 3MT と部分的に類似するジャンルとの比較によって裏付けられる。

第６章では、3MT が始まった直後の 2009 年～2010 年の発表大会の映像を収集し分析を行う。初期の頃の 3MT 発表においては、前章で分析した最近の発表に見られる慣習化された形式と異なる形式が使用されていることを示す。また、初期の頃の 3MT 発表に見られる形式が発表間で統一されておらず、多種多様であることを示す。こうした結果から、3MT 発表の形式が通時的に統一化されてきたことを指摘する。この事実が 3MT を知っている現代の話者の言語知識における抽象的な言語形式と 3MT という談話的文脈の慣習的な結びつきを示唆するものであると論じる。

第７章では、以上の事例研究を踏まえて、主に次の４つの観点から理論的考察を行う：(i)言語形式と談話的文脈の慣習的な結びつきに関する証拠、(ii)談話レベルの構文の形式的・意味的特徴、(iii)談話レベルの構文の創発・定着の過程、(iv)構文の複雑度の上昇に

伴う変化。まず(i)に関して、形式の通時的な統一化が有力な証拠であることを論じる。先行研究では共時的な形式の統一が重視されてきたが、通時的な統一化の観察がこれを上回る強い証拠であることを指摘する。(ii)に関しては、談話レベルの構文における全体の継起的構造と部分の談話機能が構文を認識するに際して重要であることを示す。従来の節や文レベルの構文と比較し、談話レベルの構文の形式の記述を多層的に行う必要があると論じる。また、構文が喚起する意味に関しては、談話の組織的・社会的特徴などを考慮する百科事典的意味論に基づく考え方が妥当であることを示す。(iii)に関しては、談話レベルの構文の創発・定着の過程を捉えるための二段階のモデルを提唱する。まず、新しい状況（例えば 3MT）が現れた当初、この状況に対応する決まった言語形式がないため、話者は機能的動機付けに基づいてその場しのぎの言語形式を選ぶ。その状況が繰り返し現れ、複数の話者が互いに類似する言語形式を用いて対応する中で、実際の言語経験の一般化による言語形式と文脈との慣習的な結びつきが生まれると論じる。(iv)に関しては、構文の複雑度が上がるにつれて、インスタンスに許されるバリエーションが大きくなり、語彙・統語における統一が低下し、「継起的構造」と「部分の談話機能」における統一が重要になることを示す。

第８章では、本論文の内容をまとめ、今後の課題を述べている。以上で見てきたとおり、談話と文法の関係を論じる認知言語学・構文文法の先行研究では意見の対立が目立ち、談話に対する一貫性のある適切なアプローチがなされていたとは言い難い。それに対して、本論文は、事例研究と理論的考察を通じ、先行研究に見られる対立の解消に貢献する新たな実証的証拠を提示し、談話レベルの慣習的な言語知識の創発・定着を説明する新たなモデルを提唱している。

使用基盤の枠組みでは「文」は特別なステータスを有しない。慣習的な言語知識が文境界を越えたレベルでも存在している。ヒトの慣習的な言語知識の解明を目指す認知言語学は、談話にも目を向けなければならない。今後は、さまざまな抽象度と複雑度の談話レベルの構文を研究対象とすることで、本論文の理論的考察を検証する必要がある。また、今回の 3MT の事例研究のように、定着の過程の途中にある談話をさらに分析することで、慣習化の過程をより深く理解できることが期待される。

Keio University

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Ash Leigh Spreadbury

Title of Thesis:

Emergence of Discourse in and as Constructions （創発する談話—構文の中の姿、構文としての姿—）

Summary of Thesis:

This thesis examines the relationship between discourse contexts and conventional linguistic knowledge from the viewpoint of Construction Grammar, focusing on the two related aspects of this relationship contained in the title of this thesis (discourse *in* and *as* constructions). On the one hand, knowledge regarding discourse contexts must form a part of our conventional knowledge of grammatical constructions, since some constructions are only acceptable in certain contexts or reliably change meaning depending on the discourse context (e.g., Giltrow 2010; Kaimori 2016; Östman 2005; Nikiforidou 2021). On the other hand, these discourse contexts themselves behave like complex grammatical constructions in the sense that schematic form conventionally evokes a certain meaning (e.g., Antonopoulou & Nikiforidou 2011; Imo 2010; Östman 2005).

The nature of the relationship between knowledge of discourse and our conventional linguistic knowledge has been the subject of some debate in the field. Some researchers argue for the sort of conventional association between discourse and linguistic form described above (e.g., Hoffmann & Bergs 2018; Nikiforidou 2015, 2021; Ruppenhofer & Michaelis 2010). Others hold that knowledge of discourse and knowledge of grammar are separate, not conventionally linked, and that correlations between the two (i.e., the tendency to use certain constructions in certain discourse contexts) can be explained by speaker's making choices based on the functional requirements of the situation (e.g., Fischer 2015; Matsumoto 2015). This thesis provides new evidence in favor of the former position (conventional association between discourse and form), models the form and function of linguistic constructions on the discourse level, and puts both conventionalization and functional motivation in their proper places as parts of two-step model of the emergence of discourse-level constructions.

This thesis presents three case studies of discourse-level constructions, varying in complexity and stage of development. These studies provide evidence that multi-sentential, complex, schematic form can be conventionally linked with a function in the manner of a grammatical construction. The forms and functions of these constructions are examined, as well as their constructionalization processes and motivations.

Based on these case studies, this thesis demonstrates that, first, the tendency toward formal homogeneity over time in complex genres is evidence of conventionalization. Second, the form of discourse-level constructions is highly layered: we must consider both the structure of the whole and characteristics of the parts, such that the discourse-functions of the parts contribute to the the form of the whole. Third, both functional motivation and conventionalization have their places in a two-step

model of the development of complex, conventional patterns of discourse. Fourth, as the internal symbolic complexity of a construction increases, the sequence and discourse-functions of the parts becomes more important than lexical and syntactic form, and the amount of acceptable variation in size and complexity between individual instances becomes greater. In this way, this thesis contributes to our understanding of the relationship between discourse and grammar, and our understanding of the form, function, and emergence of discourse-level constructions.